

A photograph of a dense green forest with large blue Japanese characters overlaid on the left side. The characters read from top to bottom: '木に宿す', '年々この木に', '棲み下りる'.

人は、神をもつてゐる。
朝も、歴史をもつてゐる。
させな過ぎて、勇者をクロスするとき
その人としての歴史
が浮かぶのない、「すむは」となる。
人を変化し、時をまた変化する。
人が自分の歴史を、「ひと」のように、
歴史を作りんとするのだろうか。
「ゆきと雪」と、一けた消えた男をいたむ
東山元、雪月花客は訪れる。

菊の御紋が飾られた豊國神社や、ものものしい石碑の建仁寺はバスして、豊國神社の裏手から博物館へ抜ける扉をくぐる。真夏の昼間でも薄暗いその森は、セミやチヨウ掘りに絶好のポイントだった。館内では、サツキに囲まれた池で魚やおたまじくしをすくう。ときには日吉神社の横手で飼い猿を冷やかして豊国廟へ。長い長い五百階段では、果てしないじやんけん遊びの始まりだ。

昭和10年代の後半、それは日本中のどこでもふつうに見かけられた光景だったろう。鎮守の森や寺の敷地で遊ぶのは、近所の子どももらの特権だ。ときには寺から坊さんが出てきて、「ものの命は大切にしいや」と諭しつつ、饅頭や最もくくれることもあった。

「今思うと、入ったらあかんような所で遊んで、たしなめられてたんかもしれませんなあ玉置氏が笑うように、どこまで行つても歴史とそれによつわる名声から逃れられないのが、京都という王城の地の宿命だ。すべての町名に由来があり、堂守もいない社寺にも名前があつた。それでも戦前の東山は、地域住民の生活と密接に結びついていた。ときどきはよそのオヤジに叱られたり、コツンとやられたりしながら、たっちゃんが町に抱かれて育つた期

第三十八弾「たつちゃんの東山ゴンタ天国三景」編



税金対策で壊してしまおか、と思ったこともある古い家。ボストン旅行の際に古い家の保存状態のよさが目につき、それからはどうしたら残せるかに熱中しました。





石段の上と下でじゃんけん。「ええっ、チーで2つしか進めへんの？」あたしらは「チ・ヨ・コ・レ・エ・ト」で6つやったよ」とお嬢さん。

間は、あいにく短かった。

「4年生のときに空襲が始まりましたので、ウーツと鳴ったら防空壕に入る。5年生の4月には、美山町へ学童疊開です。勉強もないけど遊ぶこともなく、自給自足の畑づくりやタキギ拾いに明け暮れました」
当時のエピソードを、氏は克明に覚えていた。脚気のために宿坊から学校への1里(約4 km)を通えなくなつた友がいた。学校近くの寺に移る彼のため、夏休みの1日を割いて、同級生たちが身の廻り品を運んだ。体格の良かったたつちゃんは敷布団の係。小学生にとっては身に余る大役である。下を向き、身体を二つ折れにして歩いたが、どんどん他の子どもたちとの隙間は離れてゆく。汗を掌でぬぐい、焦って踏み出すと大きな布団が田んぼ道に引きずる。
「その情けない格好は、今でも目に浮かぶようです。見ると見かねなんでしょう。隣で農作業をしてはつたおばあちゃんが腰ひもを取り出して、くるくるっと」

背負い直してくれるのかと思ったら、自分の背中にゆわえて、すたすた歩き始めた。たつちゃんはあわてて付いてゆく。お寺の門前まで来ると、「ほん、こっからは自分で行き」と、おばあちゃんは布団をたっちゃんの背中に返した。

「忘れられませんよ。運んでくれるだけ、背負わせてくれるだけの親切ならある。しかし、重荷を運んでくれたうえに、最後に私に花を持たせてくれたんですから」

この事件は、氏の人生観を養うのに役立つたばかりか、後年手狭になった駅の工場を新設する段に、美山町という遠隔地をあえて選ばせたきづかけにもなっている。

「美山町は第一の故郷です。親元から初めて離れた子どもにとって、嫌なことや辛いことは山とあつたけど、お蔭で成長できたんやから」

昨年その地に建設した工場では、とくに高齢者を募って働いてもらっている。あの時のおばあちゃんには返しができないが、地域の活性化にすこしても役立てば、と思ってのことだ。

激しい戦争が終わり、京都の町は幸いほどんど無傷で残つたが、食糧不足は深刻だった。



市には、人を育てる機能がある。家の中の閉ざされた空間では起りこりようのない体験に、子どもは子どもなりの智恵を持ち寄つてひとつひとつ、乗り越えてゆく。



「うちの近所は、大仏殿を建てるときに高野山から降ってきた上人さんが住まわはったので『上人町』。石垣の人足が集まつたのが『石垣町』で、健職人の住んだのが『鍵屋町』や『はかにも塗師屋町、大坂町、棟梁町と、みな由来がある。



音羽の滝からの流れは、地下を通り音羽川となつて、半兵衛塾本店の前で鴨川に様く。



ひとまわり成長して帰つてきたたつちゃんは、自宅前の鴨川で釣りに励む。オタマジャクシを追つた国民学校のころとはちがい、栄養補給が目的だ。河原で手にした棒切れで水面を叩いて、逃げる魚を手掴みにする。家から大きなハンマーを持ち出して、魚の潜む石を叩いて、「失神漁」を行なうと、かなりの大きさのオイカワやハイジヤコが獲れた。土手では柔らかな草を揃んで、おひたしにする。

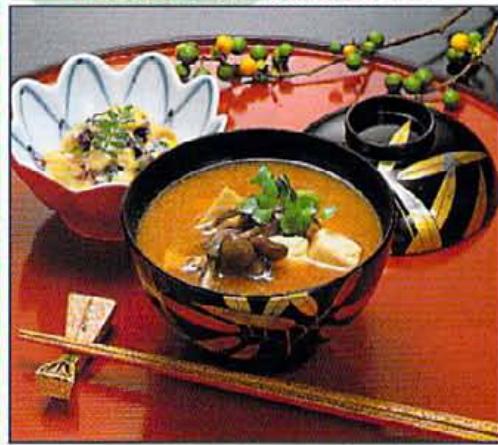
「戦前は、お茶屋の台所でおすもしをよばれたりして、羽振りが良かつたんやけどね」五条坂の洛東中学校へ進んだたつちゃんの行動半径は広がり、清水寺が巣になつた。当時は「清水の舞台」にも、一人か二人しか人の姿は見えない。参拝料など言わざもがなだらう。門前で茶店を営む同級生の洋子ちゃんの家で、ラムネを飲んだりお水をうるまつてもらつたときの甘酸っぱい思い出は、今も昨日のことのようによみがえる。

余談になるが、この取材で氏の健脚ぶりには実に驚かされた。豊國廟の五百階段を息切れもせず登り、清水寺の石段をまっすぐに背を立てて歩いてゆく。聞けば、地元の人々は毎朝5時から7時に清水さんを參拝する習慣があるとか。寺社詣では、なまなかなショギングよりも、よほど効果があるようだ。

豊國廟といい、清水寺というが、いずれも東山三十六峰に連なる高台の一部である。古寺名刹が並ぶうえ、三年坂、女坂、清水坂と

京ごろ

大宮人のひそやかなる贅沢。
西京白みそに舌鼓を打つ。



人生は潔白、と詩人は言うけれど、旅から帰つて家のお味噌汁をすると、涙が出そうにほつとすることがある。やさしい香りと、日本人に生まれてよかったなあと、柄にもない感情がこみ上げる。

そんなお味噌汁のルーツは、大陸から伝わった『醤（ひしお）』。甘酒をヒントに、米を大豆の倍以上も仕込む。発想も贅沢だが、西京味噌とも呼ばれる白味噌は京都独特のもので、上品な甘味と洗練された旨みが、京料理に欠かせない。このまつりし

だつた。公家や茶人に愛された白味噌の風味は、やがて都人にも知られ、上そゆきの菓子や筒句のご馳走になる。年の始めのお雑煮と雄祭りのてっぽい、花びら餅。御味噌のささやかな贅沢は、大宮人の嗜みが心を打つのは、日本人の好みへの情熱から生まれたのだ。歴史やドラマがいっぱい詰まっているからかもしれない。

そして、東京遷都。

この地、この水がなければ、西京味噌は造れん」と決意した当主は京の地に留まり、ようやく

「本田の西京みそ」が一般に愛され日がやつてきた。一杯のお味噌汁が心を打つのは、日本人の好みへの情熱から生まれたのだ。歴史やドラマがいっぱい詰まっているからかもしれない。

本田味噌本店



京都市上京区室町通一条558
電話番号●075(441)1121
営業時間●午前10時～午後6時



(プロフィール)
玉置辰次

麺と湯葉の製造卸しと小売りの老舗・株式会社半兵衛塾代表取締役。貞教小・洛東中から日吉丘高校へ進む。十一代目当主として多忙な日々のかたわら、アラスカへのキング・サーキン・フィッシングは毎年欠かさない。